高齢者の友人関係
－交流館の自主グループ活動者の調査から－

大勝志津穂*　　守能信次**

Friendships Among the Elderly: Survey of Group Activity Participants at a Community Center

Shizuho OKATSU* and Shinji MORINO**

Abstract

The purpose of this study is to clarify friendships among the elderly. A survey was conducted by questionnaires on elderly people active at a community center in Toyota City. The subjects of this study were a total of 1,901 (men=538, women=1363) elderly people over the age of sixty years.

The results of this study clarified the characteristics of best friends and the structure of close friends. Characteristics of best friend were as follows: (1) a person of the same sex and ages; (2) got to know each others through a hobby or sport; (3) male friends live in the same citys; (4) female friends live in the same neighborhood. Structures close friends are characterized as follows: (1) a high rate friends of the same sex the women; (2) a low rate of friends of the same age; (3) a high rate of close friends living in the same community.

A hobby and/or sports activity are important to make friends. Because their friendships developed from ways for eldery people a hobby and/or sports activity in a given neighborhood, it is suggested that such relationships may well have a certain influence upon the local community.

1．緒言

高齢社会を迎えた日本では，高齢者が生きがいをもって生き生きと健康に自立して生活を送ることが期待されており，そのひとつの手段として社会活動や生涯学習活動が注目される．内閣府の調査によると，過去１年間に社会活動や生涯学習活動のような活動に参加したことがある高齢者は半数以上を占め，特に「健康・スポーツ」や「趣味」「地域行事」への参加が高くなっている[1]．このような活動へ参加するきっかけとなるのが，友人や仲間のすすめであり，社会との新たな関わりを持つ過程において，友人や仲間の存在は重要な役割を果たすと考えられる．また，社会活動や生涯学習活動のような自主的な活動は，友人関係の延長線上にある場合だけでなく，人間関係を新たに広げる場合もあり，友人関係形成の契機としても注目される．

人間関係に関する研究は，人と人との結びつきのパターンをネットワークとして捉えるネットワーク研究を中心に行われている．それに

*大学院体育学研究科助手，**教授

は，人と人との関係を構造的に把握するものと，人と社会との関係を機能的側面から把握するものとがある．前者は関係を持つ人の数（規模），交流の回数（頻度），つきあいの期間（継続性）などの側面から個人が持つネットワークを把握するものであり，後者は個人の行動や思考にネットワークがどのような関わりをもつのかを把握するものである．高齢者の人間関係については，支援との関わりから研究される場合が多く，家族や親族を中心に誰がどのような支援を行っているかという観点から研究が行われてきた．しかし近年，孤独死や孤立する高齢者の問題が問われるようになり，地域社会を中心としたソーシャルサポートに対する関心の高まりから，友人や近隣を含めた社会全体との関係が取り上げられるようになってきた[2-5]．

高齢者が取り結ぶ最も親しい友人の特徴は，性と年齢に対する同質性が顕著で，男性では「職場」や「学校」という場を通じて，女性では「地縁・住縁」といった居住地域との関係によって友人関係が形成される場合が多いことが明らかにされている[6]．高齢者の友人関係について前田は，価値観の類似しているもののあいだで相互選択が起こりやすく，趣味・嗜好および関心を共有しており，親子関係のように何もかも打ち明けられる相手ではないが，頻繁な接触を背景に，世間話や愚痴を聞きあい，慰めあい，気を晴らす日常的な話し相手であるとしている[7]．つまり，高齢者にとって友人は，頻繁に接触を持てる範囲に住んでおり，日常生活における相互扶助の関係にある相手であり，重要な存在であると考えられる．また，住縁を中心とした人的つながりが高齢者の友人関係の中に存在する場合には，近隣満足度が高くなり，さらに，地域内の友人関係とコミュニティ意識を強化することが高齢者の生きがいの促進と関係することも明らかにされており[8]，地域内における人的つながり，特に友人関係の形成が地域社会との関わりにおいて重要であると考えられる．

このように，生きがいや仲間づくりとして社会活動や生涯学習活動が注目され，地域社会を中心とした人間関係が地域社会との関わりにおいて重視されるならば，現在そのような活動を行う高齢者の友人関係を明らかにすることによって，高齢期における社会活動や生涯学習活動が友人関係形成とどのように関連するのか，さらに友人関係形成に地域社会がどのように関わるのかを明らかにできるのではないかと考えた．

そこで本研究では，地域社会に根ざした社会教育機関としての公民館で自主的に活動する高齢者について，①最も親しい友人との関係，②親しい友人５名の関係構造の２つの観点から友人関係を明らかにし，友人関係と地域社会との関わりを検討することを目的とした．

2．研究方法

2.1　対象の選定

本研究が対象としたのは，愛知県豊田市[注1]にある交流館である．交流館はいわゆる公民館と同じ機能を有する施設であり，市町村が設置する社会教育機関である．豊田市では平成14年の施設整備に伴って，公民館という名称から地域住民が交流を行える場として交流館という名称に変更した．交流館は中学校区ごとに設置されており，調査時点では20の交流館があった．交流館では，様々な講座や教室が開催されたり，自主的な活動が行われたりしており，地域住民の多様な活動を支える場として機能している．

本研究では，交流館で活動を行う者のうち，自主グループ活動者を対象とした．自主グループとは，交流館主催の講座や教室が終了した後に，それぞれの活動を継続的に行うために，参加者が自主的にグループをつくり活動を行う集団のことである．社交ダンス，ハイキングやエアロビクスなどの身体を動かす活動，絵画，彫刻や囲碁などの文化的な活動，読み聞かせや文庫活動などの社会教育的な活動など多様な活動が行われている．

2.2 調査方法

愛知県豊田市にある20の交流館に対して調査を依頼し，承諾を得られた17の交流館に対して，2003年7月19日から9月30日の間に調査を行った．それぞれの交流館で活動する自主グループ活動者の人数を交流館より入手し，その全員を対象として留置法による質問紙調査を行った．配布数は10，823名，回収数（率）は3,957（36.3%）であった．そのうち本研究では目的にあわせて，60歳以上の高齢者を対象に分析を行なった．分析対象者数は1,901名である．

2.3 調査内容

本研究では，個人的属性，自主グループ活動に関する項目，友人関係に関する項目について調査を行った．自主グループ活動に関する項目は，活動内容，活動実施頻度をたずねた．友人関係に関する項目は，ソーシャルネットワークの構造的側面から検討を行い，親しい友人5名について性別，年代，居住場所，知り合ったきっかけ，会う頻度，付き合いの長さについてそれぞれたずねた（表1）．

2.4 分析方法

本研究では，性別によるネットワーク構造の違いが明らかにされていること，サンプルの性別の割合に大きな差がみられることから性別による分析を行なった．

自主グループの活動内容に関する項目については，それぞれの活動内容によって対象者を「運動・スポーツ系」（洋舞・社交ダンス，ハイキング・散策，エアロビクス・ジャズダンスなどの身体を動かす活動），「趣味・創作系」（絵画・彫刻，囲碁，文芸などの文化的な活動），「社会教育系」（文庫活動，読み聞かせ，まちづくりなどの社会教育活動）に分け，さらに複数の活動を行う者を「複数活動系」とする4つのグループに分類した．

友人関係については，「いろいろなことについて話したり，意見を交換し合ったりするような友人」の有無についてたずね，友人が「いる」と回答した人について分析を行なった．まず，親しい順に「友人1」から「友人5」の5名の友人をあげてもらい，それぞれのプロフィールを明らかにした後，性型，年代型，距離型による分類を行った．性型は友人5名の性がすべて同じか否か，年代型は友人5名の年代がすべて同じか否か，距離型は友人5名がすべて近隣に住んでいるか否かの観点から分類を行った．さらに，これら性型，年代型，距離型の要素を組み合わせた統合型による分類を行ない，友人関係構造を明らかにした．

3．結果及び考察

3.1 サンプルの属性

性別では，女性が7割以上を占めた．年代では，60歳代前半が最も多く約4割となり，次いで60歳代後半が約3割を占めた．平均年齢は67.3歳であった．婚姻状況では既婚者が8割以上を占め，また子どもの有無では9割以上の人に子どもがいた．時間的拘束から見た職業分類では，専業主婦・無職が最も多く8割近くを占め，フルタイム労働者が14.0%であった．最終学歴では新制高等学校卒業が最も多く半数を占めた（表2）．

表1．調査内容

要因群	調査項目
個人的属性	性別、年齢，婚姻状況，子どもの有無
	職業，最終学歴，居住年数
自主グループ活動	活動種目，活動実施頻度
友人関係	親しい友人5人の性別，年代，居住場所，知り合ったきっかけ，会う頻度，付き合いの長さ

表2．サンプルの属性（n=1901）

	n(%)		n(%)
性別		子どもの有無	
男性	538(28.3)	いる	1682(92.9)
女性	1363(71.7)	いない	129(7.1)
		N.A.	90
年代			
60－64歳	758(39.9)	職業	
65－69歳	527(27.7)	フルタイム労働者	251(14.0)
70－74歳	345(18.1)	パートタイム労働者	132(7.3)
75－79歳	184(9.7)	専業主婦・無職	1415(78.7)
80歳以上	87(4.6)	N.A.	103
平均年齢	67.3歳		
		最終学歴	
婚姻状況		中学校	571(31.5)
未婚	14(0.8)	高等学校	910(50.2)
既婚	1473(81.7)	短大・大学以上	333(18.4)
離死別	315(17.5)	N.A.	87
N.A.	99		

3.2 活動種目と実施頻度

活動種目をみると，男女ともに「洋舞・社交ダンス」「カラオケ」「絵画・彫刻」を行う人が多く，男性では「囲碁」や「料理」，女性では「体操」を行う人も多く見られた．活動種目を分類した結果，男女ともに「趣味・創作系」が最も多く，男性では7割，女性では5割となった（表3）．活動頻度では，男女ともに「運動・スポーツ系」が最も多く，男性は69.5回／年，女性は57.8回／年となり，おおよそ1ヶ月に5回～6回活動を行う様子がうかがえた．「趣味・創作系」では，男性は45.9回／年，女性は38.9回／年となり，運動・スポーツ系より少ないものの1ヶ月に3回～4回の定期的な活動を行う様子がうかがえた．一方，「社会教育系」では，男性28.3回／年，女性20.4回／年となり，「運動・スポーツ系」や「趣味・創作系」と比較すると低い値となった．しかしこれは，社会教育系の活動が1ヶ月に1回や隔週で行われていることを反映するものである（表4）．

3.3 友人関係

友人の有無についてみると，男女ともに9割以上の人が「いる」と回答した．また，親しい友人が「いる」と回答した人の友人の平均人数は，男性では11.1人，女性では7.8人となった（表5）．平成15年の内閣府が行った高齢者の地域社会への参加に関する意識調査[1]をみると，「親しい友人や仲間がいる」と回答した人は，男性で91.3%，女性で94.0%であり，本研究の結果もほぼ同じであった．

(1)最も親しい友人のプロフィール

男性についてみると，最も親しい「友人1」の性別では93.0%の人が「同性」をあげ，年代では62.6%の人が「同年代」と回答した．友人1の居住場所では，「同一市内」が最も多く48.9%となり，次いで「同一町内」が35.7%となった．これは，最も親しい友人の8割以上が同一市内に住んでいることを示しており，比較的行き来しやすい距離に最も親しい友人が住んでいることが明らかとなった．知り合ったきっ

表3．性別による上位活動10種目

男性（n=538）			女性（n=1363）		
	種目	n （%）		種目	n （%）
1	囲碁	77（14.3）	1	洋舞・社交ダンス	238（17.5）
2	カラオケ	70（13.0）	2	体操	127（9.3）
3	料理	69（12.8）	3	絵画・彫刻	123（9.0）
4	洋舞・社交ダンス	61（11.3）	4	カラオケ	121（8.9）
5	絵画・彫刻	55（10.2）	5	社会教育	118（8.7）
6	邦楽・民謡	38（7.1）	6	文芸	116（8.5）
7	社会教育	32（5.9）	7	書道	108（7.9）
8	文芸	31（5.8）	8	コーラス	103（7.6）
9	書道	26（4.8）	9	編物・織物・手芸	99（7.3）
10	学習	16（3.0）	10	踊り	82（6.0）

表4．活動種目の類型と平均活動頻度

	男性（n=538）		女性（n=1363）	
	n（%）	活動頻度（回／年）	n（%）	活動頻度（回／年）
趣味・創作系	358（70.6）	45.9	654（51.1）	38.9
運動・スポーツ系	71（14.0）	69.5	308（24.0）	57.8
社会教育系	21（4.2）	28.3	54（4.2）	20.4
複数活動系	57（11.2）	50.3	265（20.7）	38.7
N.A.	31		82	
平均活動頻度	49.0回／年		42.7回／年	

表5．友人の有無

	男性	女性
	n（%）	n（%）
いる	490（91.1）	1307（95.9）
いない	48（8.9）	56（4.1）
平均人数	11.1人	7.8人
S.D.	24.42	10.00

かけでは，「趣味・スポーツを通じて」が最も多く50.4%であり，次いで「仕事を通じて」が19.6%となった．先行研究では，高齢男性は最も親しい友人と「職場や学校を通じて」知り合った場合が多いとされてきたが，本研究の結果はそれと異なる結果となった．つまり，現在自主グループで活動する男性は，趣味や関心を通じて知り合った関心縁に基づく友人と親しい関係にあり，継続年数からもその関係が維持されていることがうかがえた（表6）．

表6．男性の友人プロフィール

	友人1 (n=457)	友人2 (n=376)	友人3 (n=317)	友人4 (n=260)	友人5 (n=227)
	n(%)	n (%)	n (%)	n (%)	n (%)
性					
同性	425(93.0)	300(79.8)	258(81.4)	172(66.2)	157(69.2)
異性	32(7.0)	76(20.2)	59(18.6)	88(33.8)	70(30.8)
年代					
同年代	191(62.6)	158(62.7)	118(58.7)	79(47.3)	66(45.5)
異年代	114(37.4)	94(37.3)	83(41.3)	88(52.7)	79(54.5)
N.A.	152	124	116	93	82
友人の居住場所					
同一町内	160(35.7)	102(28.0)	86(28.5)	71(28.0)	52(24.0)
同一市内	219(48.9)	191(52.5)	144(47.7)	124(48.8)	118(54.4)
同一県内	57(12.7)	56(15.4)	60(19.9)	46(18.1)	39(18.0)
県外	12(2.7)	15(4.1)	12(3.9)	13(5.1)	8(3.6)
N.A.	9	12	15	6	10
知り合ったきっかけ					
趣味・スポーツを通じて	227(50.4)	185(50.0)	169(54.2)	150(58.6)	141(63.0)
仕事を通じて	88(19.6)	80(21.6)	49(15.7)	48(18.8)	36(16.1)
近所に住んでいた	79(17.5)	55(15.0)	47(15.1)	25(9.8)	23(10.3)
同じ学校だった	34(7.6)	39(10.5)	30(9.6)	19(7.4)	16(7.1)
配偶者を通じて	7(1.6)	3(0.8)	7(2.2)	5(2.0)	3(1.3)
子どもを通じて		2(0.5)	1(0.3)	1(0.4)	3(1.3)
その他	15(3.3)	6(1.6)	9(2.9)	8(3.0)	2(0.9)
N.A.	7	6	5	4	3
会う頻度（回／年）	65.9	44.3	37.3	26.7	19.8
付き合いの長さ（年）	16.2	13.0	10.1	7.5	6.9

女性についてみると，最も親しい「友人1」の性別では97.9%の人が「同性」をあげ，年代では63.4%の人が「同年代」と回答した．高齢女性の最も親しい友人は，性別，年代とも同質の場合が多いことが明らかにされており，本研究でも同じ傾向となった．居住場所では，「同一町内」が最も多く54.2%であり，次いで「同一市内」が37.3%となった．知り合ったきっかけでは，「趣味・スポーツを通じて」が46.0%，「近所に住んでいた」が30.4%となった．先行研究において，高齢女性の友人関係は，地縁や住縁をきっかけとして形成される場合が多いと報告されてきたが，本研究では，地縁や住縁よりも関心縁をきっかけに知り合った場合が多い結果となった．このような結果となった要因としては，先行研究が一般的な高齢者を対象としていたのに対し，本研究では自主的に何らかの活動を行う比較的活発な高齢者を対象としたことが考えられる．つまり，何らかの活動を行う高齢者は，地理的なつながりよりも自分の趣味や嗜好に関連した人と接触を持つ機会が多く，そのことが親友関係を形成するひ

とつの要因になることが推測できる．前田が言うように，高齢者の友人関係が趣味や嗜好，関心を共有している場合が多いことを考慮すると，このような活動が友人関係形成の手段として有効であり，また，友人の半数以上が「同一町内」に住んでいることを考えると，日常生活空間にある施設での活動が，関心縁を通じた友人関係を近隣に形成する重要な役割を果たす可能性が示唆された（表７）．

以上，男性と女性の最も親しい友人である「友人１」のプロフィールを明らかにしたが，男性と女性を比較してみると，やはり女性の方が性と年齢に対する同質性が高いことが明らかとなった．一方，知り合ったきっかけでは，男女ともに「趣味・スポーツを通じて」が最も多く，次いで男性では「仕事を通じて」，女性では「近所に住んでいた」という結果となった．先行研究では，男性は「仕事」という場，女性は「地域」という地理的な要素が大きな要因となって

表７．女性の友人プロフィール

	友人１(n=1217)	友人２(n=927)	友人３(n=803)	友人４(n=639)	友人５(n=562)
	n(%)	n（%）	n（%）	n（%）	n（%）
性					
同性	1190(97.9)	894(96.5)	773(96.4)	611(95.8)	533(95.0)
異性	25(2.1)	32(3.5)	29(3.6)	27(4.2)	28(5.0)
N.A.	2	1	1	1	1
年代					
同年代	613(63.4)	436(59.0)	356(56.6)	257(50.3)	231(53.0)
異年代	354(36.6)	303(41.0)	273(43.4)	254(49.7)	205(47.0)
N.A.	250	188	174	128	126
友人の居住場所					
同一町内	631(54.2)	436(49.0)	349(46.2)	252(27.8)	221(41.4)
同一市内	435(37.3)	356(40.0)	324(42.9)	272(44.7)	242(45.3)
同一県内	80(6.9)	77(8.7)	69(9.1)	69(11.3)	56(10.5)
県外	19(1.6)	21(2.3)	14(1.8)	16(2.6)	15(2.8)
N.A.	52	37	47	30	28
知り合ったきっかけ					
趣味・スポーツを通じて	546(46.0)	450(49.6)	376(48.4)	309(49.7)	283(51.2)
近所に住んでいた	361(30.4)	230(25.4)	186(23.9)	138(22.2)	134(24.2)
仕事を通じて	132(11.1)	111(12.2)	102(13.1)	77(12.4)	62(11.2)
同じ学校だった	70(5.9)	59(6.5)	52(6.7)	60(9.6)	42(7.6)
子どもを通じて	53(4.5)	35(3.9)	34(4.4)	22(3.5)	11(2.0)
配偶者を通じて	10(0.8)	9(1.0)	11(1.4)	10(1.6)	11(2.0)
その他	15(1.3)	13(1.4)	16(2.1)	6(1.0)	10(1.8)
N.A.	30	20	26	17	9
会う頻度（回／年）	77.7	49.5	38.9	29.1	26.2
付き合いの長さ（年）	17.3	12.4	10.3	8.4	7.1

いたが，本研究でもその傾向は少なからずみられた．

(2)親しい友人５名のプロフィール

男性の「友人１」から「友人５」の親しさの程度の違いによるプロフィールの傾向をみると，親密さの程度が薄くなるにつれて女性の割合と異年代の割合が増えることがわかる．また，親しいほど付き合いが長く，会う頻度も多いことから，付き合う長さや会う頻度の多さが親しさの順位を決める要因となることがうかがえた．一般に男性では，職場が友人を形成する上で重要な要因となるため，退職は大きな転機となる．退職後に生涯学習活動や社会活動に参加する人もおり，地域社会との関わりがその時点から始まる人もいる．つまり，高齢男性にとって単に近所に住んでいるというような地縁だけではなく，趣味やスポーツ活動という関心縁を通じた友人関係の形成が，高齢期において容易であることが示唆された（表６）．

次に，女性の「友人１」から「友人５」の親しさの程度の違いによるプロフィールの傾向をみると，性別，年代についてはあまり変化が見られず，すべての友人において同性が９割以上，同年代が半数以上を占めた．知り合ったきっかけについても，「趣味・スポーツを通じて」の割合がほぼ半数以上を占めた．友人の居住場所については，親しさの程度が薄くなるにつれて「同一市内」の割合が増える傾向がみられた．つまり，自主的に活動を行う高齢女性でも，親しさの程度による友人構造に変化は見られず，比較的同質の人と友人関係を形成する傾向が明らかとなった．しかし，友人と知り合ったきっかけでは，一般に地縁や住縁をきっかけに友人関係を形成する場合が多いと言われてきたのに対して，本研究では関心縁によって友人関係が形成されている場合が多い結果となった．また，友人が同一市内に住んでいる場合が多く，このような活動が近隣を中心とした友人関係形成の手段や維持につながる可能性が示唆された（表７）．

以上，男性と女性の友人のプロフィールの結果を比較してみると，女性では性と年齢に対して同質の人と友人関係を形成する人が多いことが明らかとなった．この結果は先行研究と同様であり，交流館での趣味やスポーツ活動が友人関係の構造に関連を持たないことが考えられる．しかし，交流館で活動する女性の割合が多いことを考えると，男性にとっては女性との関わりを持つ機会が増える一方，女性にはその機会が少なく，同じように活動を行う場合でも性別による友人関係構造に違いが現れたと考えられる．友人の居住場所をみると，男性が同一市内の割合が多いのに対し，女性は同一市内だけでなく同一町内の割合も多く，女性の方がより近隣に友人関係を築いていることがわかった．また，知り合ったきっかけをみると，男女とも「趣味・スポーツを通じて」と回答する人が多く，高齢者の友人関係形成にとって，このような活動が重要なきっかけとなることが明らかとなった．しかしながら，男女ともに会う頻度と付き合いの長さの傾向をみると，親しいほど会う頻度が多く，付き合いが長いことが分かる．つまり，生涯学習活動を行う高齢者の場合，頻繁に顔を合わせ，共通の趣味や関心を持った人を友人ととらえる可能性が高く，それ以外の人とはあまり接触を持たない閉鎖的な一面をもつ可能性が推測された．また，趣味の活動が友人関係継続の要素として重要であるとした矢部の研究結果[9]を考慮すると，趣味やスポーツ活動を通じて形成された友人関係が比較的高齢になっても維持されることが推測され，このような友人関係が趣味やスポーツ活動だけの関係に限らず，地域社会全体に広がれば，趣味やスポーツ活動を通じて形成された友人関係が，地域社会に何らかの影響を与える可能性が考えられる．

(3)友人関係構造

表８に，性型，年代型，距離型，統合型の類型結果を示す．性型では，男性の６割，女性の９割が「同性型」となり，統計的に有意な差が見られた．年代型では，男性の67.9%，女性の

表8．友人の類型

	男性（n＝490）	女性（n＝1307）	$\chi 2$ 値
	n(%)	n(%)	
性型			
同性型	270(60.0)	1100(90.8)	215.86***
混成型	180(40.0)	111(9.2)	
N.A.	40	96	
年代型			
同年代型	70(32.1)	269(36.7)	1.54
多年代型	148(67.9)	464(63.3)	
N.A.	272	574	
距離型			
近隣型	269(68.8)	845(78.6)	15.11***
広域型	122(31.2)	230(21.4)	
N.A.	99	232	
統合型			
同性同年代近隣型	40(21.9)	196(29.4)	154.75***
同性同年代広域型	7(3.8)	28(4.2)	
同性多年代近隣型	27(14.8)	276(41.3)	
同性多年代広域型	22(12.0)	104(15.6)	
混成同年代近隣型	7(3.8)	11(1.6)	
混成同年代広域型	4(2.2)	1(0.1)	
混成多年代近隣型	44(24.0)	30(4.5)	
混成多年代広域型	32(17.5)	22(3.3)	
N.A.	307	639	

***p＜.001

63.3%が同年代も異年代も含む「多年代型」となった．距離型では，男性の68.8%，女性の78.6%が「近隣型」となり，統計的に有意な差が見られた．つまり，性型と距離型において性別による差がみられ，女性の性と距離に対する同質性が明らかとなった．統合型では，男性では「混成多世代近隣型」「同性同年代近隣型」が多くそれぞれ24.0%と21.9%となった．女性では「同性多世代近隣型」が41.3%と最も多かった．つまり，男性では性や年代に関係なく，近隣に住む人と友人関係を形成する人が多く，女性では同性で近隣に住む人と友人関係を形成する人が多いことが明らかとなった．このように，男性において性の同質性が強く現れなかった要因としては，交流館で活動する人の多くが女性であり，男性にとっては異性と交流を持つ機会が多くなるからだと考えられる．一方，年代においては男女とも同質性が低く，関心縁を通じて形成される友人関係が，異なる年代の人との交流を可能にしていることが示唆された．また，男女ともに近隣型が多いことから，地域社会内に友人関係が形成されている可能性が高く，金子の研究結果[8]から考えると，このような人間関係が近隣との関わりを高め，

それが地域づくりや地域福祉といった地域を中心とした政策に働きかける可能性が期待できる．

4．結語

本研究では，交流館で自主的にグループを作り活動を行う高齢者の友人関係を明らかにし，友人関係と地域社会との関わりを検討することを目的として研究を行った．その結果，最も親しい友人は，男女ともに同性同年代で，趣味・スポーツ活動を通じて知り合い，男性では同一市内に，女性では同一町内に住んでいる場合が多いことが明らかとなった．親しい5名の友人関係構造では，女性の性に関する同質性が顕著に現れた一方で，男女ともに年代に対する同質性は低かった．また，比較的に近隣に友人が住んでおり，趣味やスポーツ活動を通じて知り合った場合が多いことから，趣味やスポーツ活動を手段として形成された友人関係が，地域社会内に存在することが明らかとなった．

これまで高齢者の友人関係については，最も親しい友人の性と年齢に対する同質性の高さが明らかにされており，本研究でも同様の結果となった．しかしながら，知り合ったきっかけについては，これまで男性は職縁，女性は地縁や住縁に基づく関係によって形成される場合が多いと報告されていたのに対し，本研究では趣味やスポーツ活動という関心縁に基づく関係によって形成される場合が多いことが明らかとなった．この結果は，高齢者にとって趣味やスポーツ活動が友人関係形成の手段として重要であることを示唆するものである．さらに，趣味やスポーツ活動を通じて知り合った友人が，同一町内や同一市内に住む場合が多いことを考えると，このような人的つながりを広げていくことによって地域社会と関わりをもつ機会が増すことも考えられる．しかしながら，友人関係が趣味・スポーツ活動をきっかけに形成されるものの，その集団内だけで人間関係が形成される場合には，その集団が集団以外の人を寄せ付けない閉鎖的な雰囲気を持つ場合もある．趣味やスポーツ活動を行う集団が地域社会と関わりを持つためには，集団以外の人や他の集団との相互関係の構築が重要になると思われる．つまり，関心縁に基づく地域内の人的つながりの構築が，集団内だけの閉鎖的なものではなく地域社会全体に広がるならば，地域社会との関わりや近隣との関係に効果的に働く可能性があると考えられる．

本研究では，日常生活空間にある施設で生涯学習活動やスポーツ活動を行う高齢者の友人関係を明らかにし，彼らの友人関係形成に趣味やスポーツ活動が有効な手段として働くことを示すことができた．しかし，本研究で用いた統合型の友人関係構造は，カテゴリーに大きな偏りが見られ，その後の分析に使用できなかった．今後，多変量分析の手法を用いることにより，性，年代，距離のどの要素が影響を与えるのかという点を踏まえながら新たな分類を試みたいと考えている．また，本研究の対象者を交流館で活動を行う高齢者に限定したため，他の施設で活動を行う高齢者や，あまり活発に活動しない高齢者の実態を把握することができず，本研究の結果が交流館という場による影響なのか，活動の有無によるものなのかどうかは検討できなかった．今後，多様な高齢者との比較を行うことでこれらの課題を解決するとともに，生涯学習やスポーツ活動を手段として形成された友人関係が地域社会とどのような関わりをもつのかを検討したいと考えている．

注釈

1）平成17年4月の市町村合併以前の豊田市

参考文献

1）内閣府．高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果.2003.
2）玉野和志．団地居住老人の社会的ネットワーク．社会老年学　32：29－39，1990.
3）前田尚子．エイジングとパーソナルネットワーク－友人関係機能を中心に－．岐阜聖

徳学園大学短期大学部紀要 35：69－85，2003.
4）中村利昌，奥山正司．老年期における女性のソーシャル・サポートネットワーク－大都市・老夫婦の世帯の女性をとおして－．社会学論叢 107：1－29，1990.
5）野辺政雄．高齢女性の社会的ネットワークとソーシャルサポート－世帯類型と年代別分析－．ソシオロジ 42（2）：65－85，1997.
6）西下彰俊．高齢女性の社会的ネットワーク－友人ネットワークを中心に－．社会老年学 26：43－53，1987.
7）前田尚子．老年期の友人関係－別居子関係との比較検討－．社会老年学 28：58－70，1988.
8）金子勇．都市高齢者のネットワーク構造．社会学評論 38（3）：336－350，1987.
9）矢部拓也，西村昌記，浅川達人，安藤孝敏，古谷野亘．都市男性高齢者における社会関係の形成－「知り合ったきっかけ」と「その後の経過」－．老年社会科学 24（3）：319－326，2002.